下長中

意欲的・主体的・協力的に活動する生徒の育成

～生徒が自ら学び考え表現できるための教師のはたらきかけの工夫を通して～

（３年計画の４年次）

校　長　　三　浦　　一　純

１　研究主題について

令和元年度に「意欲的・主体的・協力的に活動する生徒の育成～自ら学び考え表現できるための教師のはたらきかけの工夫～」を設定し３年経過したが、新型コロナウイルス感染症の影響により、思うような実践ができていないのが現状である。そのような中、昨年度本校では、研究主題の具現化のため、授業の始めに学習課題(ねらい)を板書等で明示するともに、ねらいに迫るための発問や明確な指示等、導入段階における教師のはたらきかけを意識した授業実践を行った。さらに、学力定着につながる学習活動を設定しその結果を確認する作業を行ったところ、生徒が意欲的に授業に臨み、主体的に活動するようになり、ＮＲＴや国や県が実施する学習状況調査の結果等からも少しずつ効果が表れてきている。

一方、教師のはたらきかけを工夫するためには、ＩＣＴ機器の積極的な活用や特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりは必要不可欠であると考える。昨年度本校においてＩＣＴ活用に関する研修会を実施し、各教科においてＩＣＴ機器を用いた授業を実践するとともに、板書やグループ活動の工夫など、特別支援教育の視点を取り入れた授業実践により、教師のはたらきかけの工夫につなげていきたい。

以上のことから、新型コロナウイルス感染症の影響により十分な実践が進まなかったため、引き続き上記の研究主題により取り組むこととし、教師のはたらきかけを工夫することで、生徒が意欲的・主体的・協力的に活動することができるようにするための実践を進めていきたい。

２　研究のねらい

生徒が、自ら学び考え表現し、協力して活動できるようにするための効果的な指導として、教師のはたらきかけを工夫をする。これにより、生徒の学習内容の理解が深まるとともに、意見交換や話合いなどを通して「わかった！できた！身についた！」が実感できるようになり、意欲的・主体的・協力的に活動する生徒が育成できると考える。

３　研究仮説

効果的な教師のはたらきかけの工夫をとおした授業において、次の３点を実践することにより、意欲的・主体的・協力的に活動する生徒の育成ができるものと考える。

(1) 授業の始めに学習課題（ねらい）を、板書等で明示する。
(2) 学習課題(ねらい)が理解されているかを確認するとともに、考えさせるための時間をとる。
(3) 教材教具の精選や学習形態(ＩＣＴ機器の活用など)を工夫した授業実践を行う。

４　研究内容

(1) 研究主題に関わる研修を「研修Ａ」、主題以外の研修については「研修Ｂ」として実施する。

①　「研修Ａ」について

ア　研究授業(要請訪問)の実施

授業者　：教諭　三浦　直美　　国語(２年)

イ　授業参観月間の実施（第１回:５～６月、第２回:１０～１１月）

各教科部会で授業を参観し、テーマについての実践を確認する。授業者は参観者からの視点表をもとに、授業を振り返る。教科部会で視点表をまとめ、教科指導に生かす。

②　「研修Ｂ」について

タブレットの活用に関する研修を実施する。各教科で学期１回以上タブレットを使った授業を行う。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく研究授業「研修Ａ」

月	日	内容	形態
４	５（火）	第１回　校内研修	全体会(共通理解)
５～６月		第１回　授業参観月間	各教科部会
５	２４(火)	教育指導課センター(計画)訪問 訪問者　教育委員、三八教育事務所、教育指導課、総合教育センター、こども支援センター	分科会
１０	１２(火)	研究授業(要請訪問) ２年　授業者　教諭　三浦　直美 指導助言　教育指導課　中村　美穂 主任指導主事	校内研修(集中授業) リモートによる参観授業 研究協議・指導助言は全体会
１０月～１１月		第２回　授業参観月間	教科または学年ごと

(2) 一般研修「研修Ｂ」

月	日	内容
６	１	「一人一台情報端末の活用」 講師　八戸市総合教育センター　石井　一二三　主任指導主事 内容　①授業での活用事例(スライド・ジャムボード・スブレットシート) ②八戸版 ICT の学びへの活用
７	１２	「情報モラル研修」 講師　八戸市総合教育センター　石井　一二三　主任指導主事 内容　① SNS でのなりすまし　②個人情報の取り扱い　③不適切なウェブサイト　④アクセス許可について

６　研究の成果

(1) ５月に行われた教育指導課センター(計画)訪問では、分かる授業を展開するために、①導入段階、②展開段階、③終末段階のいずれかの場面において、「教師のはたらきかけの工夫」を取り入れた授業を行った。明確な指示と発問をすることで、生徒が意欲的に授業に臨んだり、互いの考えを認め合ったり、主体的に活動したりする場面が随所に見られ、学習に効果的であることが分かった。

　１０月に行われた研究授業(要請訪問)では、デジタル教科書を活用し、詩を読んだ後に疑問点や気付いたことを生徒に挙げさせ、全体で確認することで共通理解することができるなど、有効に活用することができた。

(2) ６月に行われた「一人一台端末の活用」では、学校におけるタブレットの有効活用を目指して研修を行った。教師全員が十分に使いこなすことができていないのが現状であり、使い方にはさまざまな方法はあるが、昨年度より多くの教科で１、２学期に１度タブレット端末を使って授業を行うことができた。また、７月に本校生徒と職員を対象に開催された「情報モラル研修」については、情報リテラシーの一つとして、被害にあわないようにすることや、被害を与えないような意識付けを行うことができた。

７　研究の課題

(1) 授業において参考となる点や改善点についての意見交換の場となるように、授業を見せ合う期間に幅をもたせた。しかし、新型コロナウィルス感染予防対策や学校行事、研修会などの時期と重なるなど、見せ合う授業の計画が立てづらく予定通りには実施できなかったため、さらに期間に幅をもたせたり、授業参観の仕方を工夫させたりした。

　また、研究授業(要請訪問)の学習課題を設定する場面において、生徒に考えさせた学習課題を教師がまとめていたため、生徒にまとめさせて全体及びグループに分けて考えさせると、より思考が深まると考えられる。

(2) 昨年度に比べ、大型ＴＶやモニターなどの整備が進んでいる。今後も、ＩＣＴ機器が授業の中でどのようにして活用できるのか、効果的な使用方法はあるか等について研究していきたい。また、ＩＣＴ機器のセキュリティやマナーの研修も引き続き進めていきたい。

（記入者　佐藤　孝雄）